

## 子どもが家庭に持ち込む園生活が親に与える影響

藤崎 春代

### Influence of children's kindergarten life on their homes, investigated through parents' attitudes

Haruyo FUJISAKI

Influence of children's kindergarten on their homes was investigated through assessing parents' attitudes, from the perspective that for children and parents, the kindergarten is the first transition from home to society. I conducted a longitudinal questionnaires survey with parents of three to five-year-old children that consisted of six waves. Results indicated the following: (1) Older children spoke more about friends than about their caretakers with their parents, (2) Parents felt uneasy about their children's adaptation to kindergarten life and especially about peer relations, not only at the beginning, but also during other periods of kindergarten life, and (3) Parents assessed their children's growth through children's attitudes to kindergarten events. It was concluded that parents of three to five-year-old children are involved in kindergarten life through their children's attitudes to their classes. In conclusion it is suggested that caretakers support child rearing.

*Key words* : kindergarten (幼稚園), 3~5-year-old child (3~5歳児), parent (親), event (行事), transition (移行)

#### I. 問題と目的

本研究では、「入園とは、子どもにとって家庭から家庭外の生活の場へと出ていく移行体験であるが、同時に、親にとっても、子どもを家庭外の生活に送り出す移行体験である」という立場から、子どもの園生活を通して親としてどのような気づきや育ちが促されるのかを検討する。親は、子どもの入園を契機として、園生活に関連した子どもの成長を実感する機会も数多くある一方で、子どもの言動から不安や戸惑いを感じることも多いと思われる。成長の実感のみでなく不安や戸惑いなどの経験を通して、「親としての発達」が促されるのであろう。近年、生涯発達の視点から、成人期以降についても発達という観点から研究がなされるようになり、柏木・若松(1994)をはじめとして子育てを通しての「親としての発達」を検討する研究も多くなったが、そのほとんどは子どもの誕生を契機とした発達に注目している。子

どもが誕生することは、大人だけの生活に変化をもたらす、親の心理面にも大きな影響を与えるであろうが、子どもはいつまでも家庭内での親とのかかわりのみで生活するわけではない。園という、家庭とは様々な点で異なる場、親と一緒に生活しない場へ子どもを送り出すことは、親子共に社会の一員となっていくことであり、親に自分の子育ての仕方の見直しを迫り、誕生時と同様に心理的变化の契機となると考える。

現在、多くの子ども、特に幼児が、一日の中のもっとも活動的な時間帯を保育所や幼稚園(両者をまとめて、以下では園と呼ぶ)で過ごしている。しかしながら、園で生活するということはそう簡単なことではなく、泣きながら登園したり、さらには登園を拒否したりすることは、決して珍しいことではない、従来、心理学領域では、こうした園へのなじめなさに対して、母子分離不安と関連づけて検討することが中心であった(人見, 1988; 柴田, 1985, 1986)。母親という強力な安全

基地から離れることへの不安が、泣きながらの登園や登園拒否を引き起こすという仮説である。それに対して、藤崎 (1995, 1998, 2002) は、入園を「生涯発達の中で幾度となく繰り返される人生移行の最初の経験」(山本・Wapner, 1992) と位置づけ、「幼児が家庭生活とは異なる園生活の活動の成り立ちを理解する」必要に迫られるライフイベントであると考えて、幼児の入園後の様子を園生活理解の視点から検討してきた。その結果、泣いたり、不安な様子を示したりする子どもも含めて、子どもたちは園生活を自分なりに理解しようとし、また、保育者や親はそれを援助していることが明らかとなってきた。

一方、分離不安については、近年、親、特に母親の側に注目した検討がなされ始めている。望むと望まざるとにかかわらず、子どもの入園は、母親に分離・子別れを促す(安藤, 1995; 根ヶ山, 1999, 2002; 塩崎・無藤, 2006)。0歳から6歳の子どもを持つ親を対象として、保育所に子どもを預けることを母子分離状況として検討した柏木・蓮香(2000)は、乳幼児の親が、子どもを預けることが母子双方にとって積極的意味を持つことととらえつつも、罪悪感や懸念の強い母親もいることを示唆している。また、藤崎(2011)は、幼稚園3歳児クラス入園直後の1週間に親が家庭でとらえた子どもの様子を記録した日誌を分析して、親は、子どもの園生活適応を援助しているとともに、親自身が子どもの様子を通して園生活に巻き込まれており、分離不安を感じている親もいることを示唆した。この研究では、登園時・降園時の表情に注目して子どもをタイプ分けした結果、登園時も降園時もにこにこしている〈にこにこ〉タイプ、登園時は大泣きするものの降園時はにこにこしている〈涙とにこにこ〉タイプ、大泣きしないもののにこにこ顔も見られず親が不安を読み取っている〈不安そう〉タイプの3つを見出した。そして、こうした子どもの様子に対する親の反応として、推測(子どもの気持ちや思いを推測)、対応(子どもに対する親の行動や発話)、感情(親自身の気持ち)についての記述を検討した結果、〈涙とにこにこ〉タイプの子どもの親は〈にこにこ〉タイプの親より対応についての記述が多く、感情については安心感情とともに心配感情に関わる記述も多いという結果が見られるな

ど、子どもの様子と親の反応とが関連していることが示唆された。しかし、親の反応は、記述対象児のきょうだい順(つまり、親側の園生活移行経験の有無)にも影響されるようであり、〈にこにこ〉タイプにおいて、兄姉がいる場合には安心感情のみを記述する者が多いのに対して、兄姉がいない場合は安心とともに心配感情を記述する者が多かった。また、園内で子どもの楽しそうな様子を見る際に、安心するのではなく寂しさを感じる親もいるなど、子どもの様子とは独立に親側が分離不安を抱くことも示唆された。こうした結果からは、入園が子どもにとってのみでなく、親にとっても子どもを家庭外の生活へと送り出す移行経験であることが示唆される。同様のことは、入園後1週間の日記を分析した塩崎(2002)や幼稚園の保護者会での子育てトークを分析した田丸(2012)でも見出されている。

ところで、親が子どもの様子を通して園生活に巻き込まれるのは、入園時に限られるものではないだろう。園生活の進行とともに、子どもが家庭で見せる園生活にかかわる様子は変わり、こうした様子の変化を受けて親も心配したり、安心したりしつつ、園生活を通しての子どもの成長を感じていくものと思われる。入園後の母親の変化については、入園後の7月に調査した今井(2009)が、母親にとって第1子の入園は〈自身の成長のきっかけ〉や〈挑戦〉であり、その挑戦を乗り越えることによって成長するととらえられること、第2子の入園は〈子育てにおけるステップアップ〉や〈子離れ・親離れ〉というように子育てプロセスの一時点と位置付けられるようになることを、10月から11月に調査した今井(2008)では、母親に精神的余裕や仕事への関心が生まれてくることを、見出している。入園後3カ月あるいは半年が経過した頃には、親自身も落ち着いて自身の成長を感じるようである。この他、今井(2010)の研究では、3歳児クラス入園後5週間の登園時の母子が分かれる場面の観察により母親の成長を検討している。しかし、親は入園直後からの限られた時期にのみ子どもの園生活に巻き込まれるだけではなく、入園から卒園にわたって子どもの育ちを実感したり心配したりし、そのことが親としての発達を促すであろう。そこで本研究では、入園時から卒園時までにはわたり、4月の進級時や親子に

とって重要な行事に着目して、子どもが家庭に持ち込む園生活が親に与える影響を検討する。

4月の進級時については、親子共に成長の節目と感じられやすいことに加えて、クラス替えや担任替えがある場合には入園時ほどではないにしろ移行経験となり、藤崎(2011)が入園時に検討したのと同様の子どもの様子とそれに対応した親の反応とがみられると考えられる。一方、行事については、子どもの成長を喜ぶ誕生会や端午の節句やひな祭り、季節の移ろいや自然への関心を育てる七夕や夏祭り・いも掘り・節分、日々の保育の集大成としての運動会や発表会(生活発表会とも呼ばれ、劇や歌を披露することが多い)など多様にあるが、中でも、運動会や発表会はわが子の成長や個性を実感する機会であり、親にとっても重要な機会と思われる。しかしながら、行事についての心理学的な検討は、行事を協同的な学びと捉えた検討(志村・篠原・廣瀬・成川・石川, 2007)や「気になる」子どもの保育における行事の取り組みの配慮の検討(木原, 2010)などがあるものの、十分とはいえない。さらに、親にとっての行事の意味の検討は見当たらない。そこで、本研究では進級時と行事への取り組みのなかでの子どもの様子を親がどのようにとらえているのかを検討することとする。

以上より、本研究では、幼稚園3歳児クラスに入園した子どもの親を対象として卒園までの3年間にわたる縦断的質問紙調査を実施して、以下の3点を検討する。

第一に、親の心配や安心の検討を行う前提資料として、親が家庭でとらえる子どもの園生活に関する様子を整理する。具体的には、子どもが園生活を家庭で再現したり話したりしている様子を親にたずねる。

第二に、園生活の経過に伴って、子どもの戸惑う様子を捉えて心配したかどうか、心配した場合にはその内容と対応法についてたずねる。調査対象園では、進級時にクラス替えとともに、担任替えがある。こうした変化は、子どもにとって、入園時と同様の戸惑いを引き起こす可能性がある。よって、進級前後は、子どもの戸惑う様子を受けて親も心配することが多いと思われる。一方、進級後数カ月たつ頃には子どもも担任や友だちとの関係が形成され、戸惑いが減り親の心配も

軽減されるものと思われる。また、心配なことへの対応法としては、担任への相談が考えられるが、藤崎(2011)において対象児の兄姉の入園経験のある親に心配をする親が少なかったという結果を考慮すると、そうした経験のある他の親への相談も有効なのかもしれない。

第三に、親子ともに大きな位置づけを持つと思われる行事、特に運動会と発表会に着目して、子どもの行事への取り組み方を親がどのようにとらえているのかを整理して、親にとっての行事の意味を検討する。この回答については、家庭で見られる様子のみでなく、実際の行事の際に見られる様子についても記述されると考えられる。行事当日は、わが子のみでなく、クラスの他児や他年齢クラスの子どもなど、大勢の子どもの様子を見ることができ、また集団の中の一人としてのわが子の様子を見ることがもなるため、親にさまざまな気づきを促す可能性が考えられる。そこで、当日の園での様子についての記述も分析対象とする。

なお、本研究の結果は、保育者が行う子育て支援について考える際の基礎的資料を提供するものとする。

## II. 方法

### 1. 対象者

大学付属幼稚園<sup>1)</sup>3歳児クラスに200X年から200X+3年の4月に入園した子どもの親を対象とした。入園時点での該当者数の合計は157名である。各回の分析対象者数と入園時点での該当者数に占める比率をTable 1に示す。なお、途中入園者がいる一方で、転居による途中退園者や母の里帰り出産に同行するための一時休園者がいることから、各回の配布数は異なる(途中入園者は分析対象とはしないが、調査用紙の配布・回収は行った)。

回答者の家族数は3人から7人の範囲であり、子どもにとっての祖父母と同居する家庭もあったが、子育ての主な担い手はすべて母親であり、回答者も母親であった。したがって、本研究の分析において親とは母親を指す。

### 2. 調査実施時期

本研究は、3歳児クラス入園直前から卒園に至

Table 1 調査名称・対象クラス・配布時期・回収時期・分析対象者数一覧

| 調査名称   | 対象クラス  | 配布時期 | 回収時期 | 分析対象者数(%) <sup>※)</sup> |
|--------|--------|------|------|-------------------------|
| 3歳7月調査 | 3歳児クラス | 6月   | 7月   | 103(65.6)               |
| 3歳3月調査 | 3歳児クラス | 2月   | 3月   | 86(56.1)                |
| 4歳7月調査 | 4歳児クラス | 6月   | 7月   | 84(53.5)                |
| 4歳3月調査 | 4歳児クラス | 2月   | 3月   | 67(42.7)                |
| 5歳7月調査 | 5歳児クラス | 6月   | 7月   | 72(45.9)                |
| 5歳3月調査 | 5歳児クラス | 2月   | 3月   | 46(29.3)                |

注) 3歳児クラスに4月入園した子どもの親157名に占める比率を示す

る3年余りの間に8回実施する質問紙調査(内2回は日誌記録調査も併せて実施)からなる縦断研究の、3回目から8回目までの質問紙調査から得られた資料にもとづく。各回の対象クラスと配布時期、回収時期はTable 1の通りである。対象クラスの年齢と回収時期を組み合わせ、各回の調査名称とする(たとえば、3歳7月調査とは、3歳児クラスの7月に回収した調査を示す)。

### 3. 配布・回収の手続き

園の協力を得て、配布と回収は担任を通して行った。調査用紙を子どもが持ち帰り、親が記入後、子どもに持たせて担任に提出した。

### 4. 質問紙の構成：調査内容別調査時期

各回の調査は多くの項目を含むが、今回は本研究の分析に用いた項目のみ取り上げる。

1) フェイスシート：家族構成と、主な子育ての担い手について、継続調査の第1回目調査時にたずねた。

2) 家庭で見られる園生活に関わる子どもの様子：5歳3月調査を除く5回の調査でたずねた。「園で習った歌を歌う」をはじめとするTable 2に示した11項目について、〈ほとんど毎日〉〈ときどき〉〈あまりない〉〈ない〉の中から選択を求めた。なお、「園でのルールのお話をする」「お友だちのお話をする」「先生のお話をする」「園での出来事のお話をする」「幼稚園ごっこをする」については、話やごっこの具体的内容の記載を自由記述形式で求めた。

3) 子どもの戸惑いと家族の心配：全6回の調査でたずねた。子どもに戸惑いが見られたり家族が心配したりしたことの有無をたずねたのち、差し

支えのない範囲での具体的内容の記載を求めた。そのうえで、記載した戸惑いや心配への対応法についてTable 4の項目を示し、該当するものについて複数回答可として選択を求めた。

4) 行事への子どもの取組みの様子：3歳3月調査・4歳3月調査・5歳3月調査でたずねた。子ども自身あるいは家族の印象に残っている行事をたずねたのち、子どもの取組みの様子と親の感想を自由記述で求めた。

### 5. 倫理的配慮

入園直前の3月初旬の「1日入園日(子どもに対して約2時間の慣らし保育を実施、親に対しては入園にあたっての最終説明会を実施)」の受付時に縦断調査の第1回調査用紙を配布するとともに、同日の説明会の終わりに、筆者自身が口頭および文書で調査目的や縦断調査計画の概要を伝えた。その際に、協力は任意であること、協力しない場合も園生活において何ら不利益を受けないこと、プライバシー保護の方針を説明した。配布と回収は担任を通して行ったが、調査用紙には封筒を添付して、回収時に封をして提出できるようにし、担任が回答内容を見ることのないようにした。また、毎回の調査用紙回収後1週間程度の後、結果の概要を親および保育者に文書で報告して、対象者の利益保護に努めた。

上記の一般的配慮に加えて、本研究では、次の点にも配慮した。本研究の質問紙調査では、子どもの心配な様子についての記述を求める。心配な様子のおよ半は、園生活の経過の中で自然に軽減したり、保育者や周囲の先輩ママたちに相談したりすることで解決するものだと思われる。しかし、なかには、それだけでは解決しない心配を抱える

親もありうる。そこで、筆者は、発達相談を長年にわたり担当してきており、親の心配に対して子育て相談や発達相談を行うことが可能であることから、対象者が必要だと感じた場合には、相談に応じる用意のあることを研究協力依頼文書中に記載した。これについては、毎年1・2件の相談依頼があり、対応した。

### Ⅲ. 結果と考察

#### 1. 家庭で見られる園生活に関わる子どもの様子

親がとらえる子どもの様子の変化を統計的に検討するため、該当質問項目を含む5回の調査すべてに協力の得られた43名(3歳児クラス4月入園児の親の27.4%)の親がとらえた様子について、〈ほとんど毎日〉を3点、〈ときどき〉を2点、〈あまりない〉を1点、〈ない〉を0点として得点化した。様子の得点の平均値と標準偏差、および、項目ごとに時期による平均点の差がみられるかどうかを検討するため一元配置の分散分析を行った結果をTable 2にまとめた(多重比較はTukey法を用いた)。表の上の項目ほど、入園間もない3歳7月調査の得点が高くなるように配列している。

Table 2からは、3歳クラスの7月には、ほとんど毎日のように、子どもが登園を楽しみにし(3点満点中2.8点)、園で習った歌を歌ったり(2.9点)、友だち(2.5点)や先生(2.5点)そして出来事(2.5点)の話をしたりしていることがわかる。ただし、友だちの話や出来事の話は5歳まで一貫し

て話されているのに対して、歌を歌うことは4歳クラス以降に減少し、先生の話をするのは4歳クラス後半以降減少している。この結果は、子どもの園生活が、先生との関係を支えにしているものから、徐々に友だち関係中心へと変わっていくことを示唆するものであり、親も同様の変化を感じていると思われる。お弁当を楽しみにすることや幼稚園ごっこをすることも、3歳クラスに比べて4・5歳クラスで減少しているが、これらは、一貫してSDが大きく、毎日のようにする子もいれば、全くしない子もいるなど個人差が大きいことがうかがえる。

さらにTable 2からは、3歳児クラスでは、それ以降に比べて幼稚園ごっこをする姿がみられていることがわかる。幼稚園ごっこの具体例として多く記述されていたのは「朝の挨拶をして、歌を歌って、出席確認をする」といったおあつまりごっこである。年下のきょうだいや母親あるいはぬいぐるみを相手に行っている様子が記述されている。幼稚園ごっこをするには、いつ・誰が・何をするかといった園生活の流れの理解が必要であり、園生活を通して獲得していく知識が遊びの中に次々に盛り込まれていっているものと思われる。加えてTable 2からは、幼稚園ごっこをする姿は5歳7月期にはほとんど見られなくなる一方で、園でのルールの話をするのは3歳クラスにおけるよりも4歳クラス後半以降に増え、5歳児が園でのルールについて毎日のように話している(2.7点)ことが分かる。具体例としては、「給食

Table 2 調査時期別の家庭で親がとらえる子どもの様子：得点の平均値(SD)と分散分析結果

| 質問項目               | 所属クラス<br>調査月 | 3歳        |           | 4歳        |           | 5歳        | F値       | 多重比較        |
|--------------------|--------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|-------------|
|                    |              | ①7月       | ②3月       | ③7月       | ④3月       | ⑤7月       |          |             |
| 園で習った歌を歌う          |              | 2.9(0.32) | 2.7(0.44) | 2.5(0.59) | 2.5(0.55) | 2.4(0.50) | 11.20*** | ①②>③④⑤      |
| 登園を楽しみにしている        |              | 2.8(0.43) | 2.9(0.26) | 3.0(0.21) | 2.8(0.37) | 2.9(0.32) | 1.76     |             |
| 友だちの話をする           |              | 2.5(0.77) | 2.6(0.58) | 2.4(0.65) | 2.4(0.55) | 2.5(0.59) | 1.66     |             |
| 園での出来事の話をする        |              | 2.5(0.74) | 2.4(0.70) | 2.4(0.57) | 2.3(0.61) | 2.3(0.63) | 1.18     |             |
| 先生の話をする            |              | 2.5(0.74) | 2.4(0.66) | 2.2(0.59) | 1.9(0.71) | 1.7(0.75) | 19.19*** | ①②>④⑤, ③>⑤  |
| お弁当を楽しみにする         |              | 2.4(0.82) | 2.3(1.03) | 1.9(0.93) | 1.7(1.09) | 1.5(1.03) | 10.15**  | ①>③④⑤, ②>④⑤ |
| 園でのルールの話をする        |              | 2.3(0.79) | 2.3(0.67) | 2.5(0.74) | 2.7(0.63) | 2.7(0.56) | 6.72**   | ①②<④⑤       |
| 行事を楽しみにする          |              | 2.3(0.67) | 2.5(0.51) | 2.3(0.62) | 2.4(0.54) | 2.4(0.53) | 2.38     |             |
| 給食を楽しみにする          |              | 2.2(0.97) | 1.9(0.91) | 2.2(0.75) | 1.9(0.67) | 1.7(0.76) | 3.35     |             |
| 幼稚園ごっこをする          |              | 1.7(0.98) | 1.6(0.95) | 1.3(0.88) | 1.1(0.94) | 1.0(0.86) | 10.98*** | ①>④⑤, ②>③④⑤ |
| 園で作った製作物を家でも作ろうとする |              | 1.6(0.87) | 1.8(0.65) | 1.9(0.67) | 2.1(0.66) | 1.9(0.81) | 4.47*    | ①<④         |

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

の時には手を合わせてみんなで『いただきます』を言ってから食べる」や「お外（著者注：園庭）で遊ぶときには黄色い帽子をかぶってから出る」などが記述されていた。生活の流れだけではなく、流れの中でのさまざまなルールにまで関心が出てきており、その関心をごっこ遊びではなく言語的知識として表現するようになったと思われる。園でのルールをわざわざ家庭で話すのは、子ども自身が家庭と園とでルールが違うことに自覚的になっており、親に違いを説明しているのかもしれない。親はこうした子どもの様子から、家庭とは異なる環境の中で子どもが生活していることを、そして、そのことを子ども自身が理解し意識化していることを、知るものと思われる。

## 2. 子どもの戸惑いと家族の心配

時期別に親が心配したことがあったのか、あった場合、何について心配したのかの自由記述の内容をKJ法にて整理して、該当人数・比率とともにTable 3にまとめた。この分析については、親の心配内容を数多く抽出するため、すべての時期の調査に協力の得られた対象者のみではなく、6回の調査の対象者すべてについて分析する。3歳7月調査と4歳7月調査のみ複数の内容を記述した対象者がいるため、比率合計が100%を超える。

Table 3からは入園まもない3歳7月には心配なことがある親が半数を超えるものの、3歳児クラスが終わる3月頃には心配なことがある親が15%と減少すること、しかしその後、減少傾向は

続くのではなく、4歳クラス7月には心配をする親が4割程度まで増え、その後の調査でも2から3割程度の親が心配なことがあったと回答している。3歳3月調査で心配なことを記載する親が減ったのちに、4歳でまた増えることについては、対象園が、各年齢に2クラスずつあり毎年クラス替え・担任替えがあるため、入園時ほどではないであろうが進級が一種の移行経験となっていることによるのかもしれない。そこで、次に心配の内容を検討する。

心配内容としてどの時期においても最も記述が多いのは〈友だち関係〉にかかわるものであり、心配なことがあった人の4割前後が回答している。例としては、「帰宅と同時に『今日もお友だちと遊べなかった』と言っていた（3歳7月）」、「仲良しの友だちとクラスが離れて落ち込む様子がみられた（4歳7月）」、「『友だちにしつこくされた』と訴えた（5歳3月）」などがある。友だちができないこと、進級にあたって仲良しの友だちとクラスが離れること、友だちとの付き合い方など、子どもは様々な訴えをしたり、様子を示したりしているようである。保育者との関係についての心配である〈先生への戸惑い〉は少なく、3歳7月の1例は「通園バスで担任以外の先生を嫌がった」、4歳7月の2例は「担任が変わって戸惑っていた」という記述であり、いずれも、慣れ親しんだ保育者以外への戸惑いであった。〈クラス替えの戸惑い〉は進級後の4歳7月調査・5歳7月調査の両方で記述された。初めての進級である4歳児のみでなく、2回目の進級時の5歳児で

Table 3 調査時期別の心配なことがあった人数と心配内容別の該当人数：複数回答あり

( ) 内は、各時期の心配があった実人数に占める比率%

| 調査時期 | 対象者数 | 心配があつた人<br>（総対象者に占める比率） | 心配の内容     |             |              |              |              |              |          |            |         |                       |            |
|------|------|-------------------------|-----------|-------------|--------------|--------------|--------------|--------------|----------|------------|---------|-----------------------|------------|
|      |      |                         | 友だち関係     | 戸惑い<br>先生への | 戸惑い<br>クラス替え | 嫌いな活動<br>がある | ・泣く<br>登園しぶり | 園内での<br>行動問題 | 排泄       | 園の話<br>しない | すべて     | 園生活に特<br>に関わらな<br>い理由 | 内容記述<br>なし |
| 3歳7月 | 103  | 58 (56.3)               | 20 (34.5) | 1 (1.7)     | 0 (0)        | 4 (6.9)      | 17 (29.3)    | 2 (3.4)      | 6 (10.3) | 2 (3.4)    | 1 (1.7) | 0 (0)                 | 7 (12.1)   |
| 3歳3月 | 86   | 13 (15.1)               | 5 (38.5)  | 0 (0)       | 0 (0)        | 0 (0)        | 3 (23.1)     | 1 (7.7)      | 2 (15.4) | 0 (0)      | 0 (0)   | 1 (7.7)               | 1 (7.7)    |
| 4歳7月 | 84   | 33 (39.3)               | 14 (42.4) | 3 (9.1)     | 4 (12.1)     | 2 (6.1)      | 2 (6.1)      | 3 (9.1)      | 0 (0)    | 0 (0)      | 0 (0)   | 6 (18.2)              | 1 (3.0)    |
| 4歳3月 | 67   | 20 (29.9)               | 7 (35.0)  | 0 (0)       | 0 (0)        | 3 (15.0)     | 4 (20.0)     | 0 (0)        | 1 (5.0)  | 0 (0)      | 0 (0)   | 3 (11.5)              | 2 (7.7)    |
| 5歳7月 | 72   | 16 (22.2)               | 6 (37.5)  | 0 (0)       | 3 (18.8)     | 1 (6.3)      | 0 (0)        | 1 (6.3)      | 0 (0)    | 0 (0)      | 0 (0)   | 2 (12.5)              | 3 (18.8)   |
| 5歳3月 | 46   | 14 (30.4)               | 5 (35.7)  | 0 (0)       | 0 (0)        | 2 (14.3)     | 0 (0)        | 1 (7.1)      | 0 (0)    | 0 (0)      | 0 (0)   | 3 (21.4)              | 3 (21.4)   |

も戸惑いを感じるようである。こうした進級に伴う戸惑いだけではなく、体操や給食などの特定の〈嫌いな活動がある〉ことを訴える子どもも各時期数名ずつ記述されている。〈登園しぶり・泣く〉は、入園間もない3歳7月に多い（これについては、藤崎（2011）参照）のは当然であろうが、4歳児クラスでも短期間にせよ登園を渋ったり、泣いたりすることがあるようである。このカテゴリは「登園をしぶった」「登園時に泣いた」とのみの記述が該当するため、登園を嫌がる理由については不明である。友だち関係をはじめ、前述のカテゴリが登園しぶりの背景理由として考えられるであろう。以上の心配は、家庭での子どもの様子から心配をするに至っているが、〈園内での行動問題〉では、「担任から『注意をしても聞かなかった』と連絡があった」や「園での立ち歩きなど落ち着きのなさを担任から伝えられた」という記述例にあるように、保育者からもたらされた園での子どもの様子の情報により心配をしている点が異なる特徴である。3歳に多い〈排泄〉は、「入園時おむつをしていた」という内容であるが、4歳では「一時期、頻尿になった」という心配であった。なお、3歳7月調査では子どもが〈園の話をしない〉ために心配になったり、〈すべて〉のことが心配と回答したりした親もいたが、これらの回答からは、子どもを園という家庭外の生活の場に送り出す入園が、親にとってとりわけ不安なことであることがわかる。

次に、こうした心配なことへの対応をTable 4にまとめた。3歳7月調査では、特に対応しな

かった人が心配なことがあった人の4分の1を占める。この時期の心配は、入園当初の子どもの戸惑いによるものと思われるため、「入園当初の戸惑いは時間が解決すると思った」という記述に代表されるように、園に慣れるには時間がかかり、見守るしかないと考える親がいるためと思われる。対応をした人の対応法を見ると、どの時期も《園の先生に相談》が最も多い。「バスの隣の席の年長児にたたかれたというので先生に相談したら、すぐに対応してくれた」をはじめとして、保育者の迅速な対応を評価する記述が多かった。友だち関係などは家庭では把握しきれず、また対応も難しいため、やはり保育者が頼れる存在なのであろう。《保育参観・行事の時の子どもの様子に注目》が多いのも、園のなかでの子どもの様子を見て対応を考えたい、という親の思いの表れと思われる。対応について、《母が考えて対応》や《家族で話して対応》など家庭内で対応を考えたり、対応したりする一方で、《知り合いのお母さまに相談》も多かった。同年齢の子どもを持つママ友だち、あるいは、上の年齢の子どもを持つママ友だちの話を聞くことは、具体的対応法の助言が得られるのみでなく、子どもの将来の姿を知ることでもでき、参考になるものと思われる。いずれにしろ、親は同時に様々な対応法を用いていることがわかる。

### 3. 行事への子どもの取組みの様子

前述のTable 2をみると、「行事を楽しみにする」様子は、どの時期も2.3から2.5点の範囲の平

Table 4 心配なことへの対応法別の該当人数：複数回答あり

( ) 内は、各時期の心配があった実人数に占める比率%

| 調査時期 | 対象者数 | 心配があった人<br>(総対象者に占める比率) | 特に対応しなかった人<br>(心配があった人に占める比率) | 対応した人の対応の内容 |          |         |              |                     |                      |          |        |         |        |
|------|------|-------------------------|-------------------------------|-------------|----------|---------|--------------|---------------------|----------------------|----------|--------|---------|--------|
|      |      |                         |                               | 母が考えて対応     | 家族で話して対応 | 祖父母に相談  | 知り合いのお母さまに相談 | 保育参観・行事の時の子どもの様子に注目 | 子の保育参観・行事の時の他児の様子に注目 | 園の先生に相談  | 本を読んだ  | 専門機関に相談 | その他    |
| 3歳7月 | 103  | 58(56.3)                | 16(27.6)                      | 26(61.9)    | 26(61.9) | 7(16.7) | 19(45.2)     | 34(81.0)            | 16(38.1)             | 33(78.6) | 3(7.1) | 0(0)    | 2(3.4) |
| 3歳3月 | 86   | 13(15.1)                | 1(7.7)                        | 4(33.3)     | 6(50.0)  | 1(8.3)  | 7(58.3)      | 6(50.0)             | 2(16.7)              | 12(100)  | 0(0)   | 0(0)    | 0(0)   |
| 4歳7月 | 84   | 33(39.3)                | 4(12.1)                       | 14(48.3)    | 12(41.4) | 2(6.9)  | 14(48.3)     | 17(58.6)            | 10(34.5)             | 19(65.5) | 2(6.9) | 0(0)    | 2(6.9) |
| 4歳3月 | 67   | 20(29.9)                | 1(5.0)                        | 10(52.6)    | 12(63.2) | 6(31.6) | 11(57.9)     | 6(31.6)             | 6(31.6)              | 15(78.9) | 1(5.0) | 2(10.5) | 1(5.0) |
| 5歳7月 | 72   | 16(22.2)                | 3(18.8)                       | 5(38.5)     | 6(46.2)  | 2(15.4) | 5(38.5)      | 5(38.5)             | 3(23.1)              | 10(76.9) | 1(7.7) | 0(0)    | 0(0)   |
| 5歳3月 | 46   | 14(30.4)                | 0(0)                          | 6(42.9)     | 7(50.0)  | 3(21.4) | 5(35.7)      | 4(28.6)             | 3(21.4)              | 8(57.1)  | 1(7.1) | 1(7.1)  | 0(0)   |

均値となっており、親は時期に関わりなく子どもが行事を楽しみにしている様子を家庭でとらえていた。では、親にとっての行事の意味は何であろうか。

園での行事には多様なものがあるが、「特に、お子様やご家族の印象に残っている行事は何でしょうか」という質問に対して、運動会あるいは発表会という回答が、3歳3月調査で86名中82名(95.3%)、4歳3月調査で67名中48名(71.6%)、5歳3月調査で46名中40名(87.0%)と多数を占めていた。少数の回答として、3歳3月調査では保育参観(理由:園とは異なる子どもの姿を見ることができた、など)、4歳3月調査と5歳3月調査ではお泊り会(理由:子どもが家族と離れて夜を過ごすことに感慨があった、など)など、各時期特有の行事が挙げられたが、以下では、3・4・5歳に共通している運動会と発表会についての記述を分析対象とする。なお、より多くの記述を分析対象とするため、該当する3回の調査のすべての対象者の資料を分析対象とする。

Table 5には、記述内容をKJ法により分析して得られたカテゴリと該当人数・比率をまとめた。カテゴリは3歳3月調査の該当人数が多い順に上から並べた。調査時期にかかわらず、〈1 友だちと協力できていた〉ことを記述する親が多い。一方、同じく友だちへの言及がある〈2 みんなと同じようにできた〉は年齢とともに減る。これは「泣くのではないかと心配したが、友だちと一緒にできてほっとした」というように他児と同様にできたことへの安堵感を反映しており、入園間もない3歳児の親に顕著な内容であろう。3歳ではこのほかに「親から離れて演技をする様子にたくましさを感じて感激した」という〈5 堂々・たくましい〉や、「家でも楽しそうに踊る様子に安心した」という〈9 家でも踊る〉など、はじめて多くの人の前で演じるわが子の姿や行事を楽しんでいる様子に安心したり成長を感じたりしている。一方、数は少ないながら〈15 泣いてできなかった〉という回答もあった。4歳に特徴的なのは、〈16 意欲的に取り組んだ〉である。「年少の時は

**Table 5** 運動会・発表会に関連して親が記述した子どもの取組みの様子  
人数:( )内は年齢別実人数に占める比率(%),〈 〉内は年齢別の1人あたりの記述数

| 記述内容カテゴリ                | クラス:{ }内実人数 |           |          |
|-------------------------|-------------|-----------|----------|
|                         | 3歳 {82人}    | 4歳 {48人}  | 5歳 {40人} |
| 1 友だちと協力できていた           | 14 (17.1)   | 13 (27.1) | 6 (15.0) |
| 2 みんなと同じようにできた          | 14 (17.1)   | 3 (6.3)   | 0 (0.0)  |
| 3 がんばった・一生懸命            | 13 (15.9)   | 6 (12.5)  | 7 (17.5) |
| 4 上手                    | 11 (13.4)   | 5 (10.4)  | 5 (12.5) |
| 5 堂々・たくましい              | 11 (13.4)   | 5 (10.4)  | 3 (7.5)  |
| 6 楽しそう                  | 9 (11.0)    | 6 (12.5)  | 0 (0.0)  |
| 7 (園での) 練習をがんばった        | 8 (9.8)     | 5 (10.4)  | 4 (10.0) |
| 8 家でも練習                 | 6 (7.3)     | 4 (8.3)   | 8 (20.0) |
| 9 家でも踊る                 | 6 (7.3)     | 2 (4.2)   | 0 (0.0)  |
| 10 緊張をのりこえた、人前でできた      | 6 (7.3)     | 1 (2.1)   | 2 (5.0)  |
| 11 難しそうなものおぼえる          | 3 (3.7)     | 3 (6.3)   | 1 (2.5)  |
| 12 人の踊りも覚える、人の発表も楽しむ    | 3 (3.7)     | 4 (8.3)   | 0 (0.0)  |
| 13 ハプニングあったが泣かずにできた     | 3 (3.7)     | 2 (4.2)   | 4 (10.0) |
| 14 先生の話を受けていた           | 2 (2.4)     | 1 (2.1)   | 0 (0.0)  |
| 15 泣いてできなかった            | 2 (2.4)     | 0 (0.0)   | 0 (0.0)  |
| 16 意欲的に取り組んだ            | 0 (0.0)     | 6 (12.5)  | 1 (2.5)  |
| 17 本人の気づき(頑張ればできる等)があった | 0 (0.0)     | 0 (0.0)   | 2 (5.0)  |
| 18 悔しがる                 | 0 (0.0)     | 0 (0.0)   | 2 (5.0)  |
| 19 責任感ある様子              | 0 (0.0)     | 0 (0.0)   | 2 (5.0)  |
| 20 その他                  | 8 (9.8)     | 3 (6.3)   | 3 (7.5)  |
| 計                       | 119 〈1.5〉   | 69 〈1.4〉  | 50 〈1.3〉 |



何も分からず参加していたと思うが、今年は意欲的に取り組んでいた」というように、子ども自身が見通しをもって取り組んだ様子に成長を感じていた。5歳に特徴的なのは〈9家でも踊る〉がなくなり、〈8家でも練習〉が増えることである。楽しく家で踊る、あるいは踊って家族に見せるのではなく、「苦手なところを毎日練習していた」「家で苦手なことを練習し、少しずつ出来るようになる様子に成長を感じた」という記述となっている。行事への子どもの取り組みの様子についての親の記述からは、子どもの行事の取り組み方の年齢的变化がとらえられると共に、親にとって行事が子どもの成長を感じ取る機会となっていることが示唆される。

#### IV 全体的考察

親が家庭でとらえる子どもの様子を検討した結果からは、先生の話をするのが減る一方で、友だちの話をするのは続くこと、ごっことして園生活を再現することから言語的に園生活のルールを表現するようになること、などを読み取ることができた。こうした結果は、幼児期にいざこざも含めて友だち関係が子どもにとって重要となるという指摘(斉藤・木下・朝生, 1986ほか)や、園生活の流れを言語的に報告できるようになるという指摘(藤崎, 2002)に合致している。これらの研究は研究者が園において子どもの様子を観察したり、子どもに面接調査を行ったりして得た結果であるが、家庭において親も同様の様子をとらえていると言えよう。このことは、子どもが園で研究者に見せた様子と同じ様子を家庭で見せていることを示唆すると同時に、親が子どもの様子を的確にとらえていることを示唆するものでもあろう。

子どもが家庭に園生活をもち込むことは、親を安心させると同時に、親を心配させることともなる。入園当初のみでなく、他の時期にも親は心配をしていた。ただし、このことは該当園が進級に際してクラス替え・担任替えをすることによるのかもしれないため、さらなる検討が必要である。心配内容は、友だち関係に関するものが多かったが、このことは、子どもが一貫して友だちの話を家庭でしていることと対応する。心配への対応については、園の先生に相談するほか、母親自身あ

るいは家庭内で対応したり、知り合いの母親に相談したりと様々な取組みをしていることがわかった。なお、今回の資料では、家庭で見せる園生活にかかわる子どもの様子に焦点を当てているが、心配内容の中には、保育者から指摘を受けて心配するに至った〈園での行動問題〉のカテゴリもあった。園は家庭とは異なる特徴を持つ生活の場であるため(藤崎・木原, 2010)、子どもの様子も家庭とは異なる可能性があり、子どもの園生活の特徴が、家庭で見られる子どもの様子ですべて把握できるものではないことが示唆された。親と保育者とのあいだで、子どもの様子についての情報交換をすることが重要といえる。

行事のうち、印象に残ったとの回答が多かった運動会と発表会についての子どもの取り組みの様子を記述を整理した結果からは、子どもの行事への取り組み方の変化が把握できたとともに、親にとっては行事が子どもの成長を感じ取る機会となっていることが示唆された。ただし、今回の調査ではとらえることができなかったが、成長を感じる機会であるからこそ、集団の中でのわが子の姿に心配な点がある時には、行事が不安を増大させる機会ともなるであろうということも推測できる。行事に向けての保育の取組みの重要性が示唆される。

以上の結果からは、子どもたちは親の配慮を受けつつ園生活を開始するのであろうが、いったん園生活が始まると、今度は子どもたちが園生活を家庭に持ち込み、それに対応することを通して、親も家庭に居ながらにして園生活に巻き込まれていくことがわかった。保育者は、園で子どもの様子に変化が見られると、家庭内で何かあったのではないかと感じるのであろうが、逆に、家庭で子どもの様子に変化が見られると、親は園で何かあったのではないかと感じるのであろう。

最後に、保育者による子育て支援を考える際の視点について、本研究の結果を踏まえて検討したい。保育者が実施可能な子育て支援は、①子育ての負担を軽減する、②子育て知識を提供する、③園で子どもを育てる、の3つにまとめることができるだろう。以下、順に述べる。

##### ①子育ての負担を軽減する

園が行う子育て負担軽減の取組みとしては、入園していない子どもに対しての一時預かり保育や

園庭開放などがある。一時預かり保育により、親、特に母親は、理由の如何を問われることなく、子育てから開放される時間を持つようになった。子どもから離れて過ごす時間を持つことは、母親に、母子密着あるいは母子カプセルと呼ばれるような母子だけでの行き詰るような時間を、客観的に捉えるきっかけを与えてくれるだろう。

入園している子どもの親にとっては、入園自体が子どもと離れる時間を持つことになるわけであるが、本研究で検討したように、子どもの園生活について心配することで子育て負担が増す側面があることが分かった。本研究で親が保育者への相談がすぐに対応してくれたがゆえに有効だったと答えているように、保育者は迅速な対応をすることが重要だろう。さらに、他の親への相談も有効だったという回答からは、孤立しがちな母親を繋ぎ、子育てネットワークを形成することも保育計画に盛り込むことができるであろう。このネットワークの中で、互いに悩みを共有し、助言しあうことにより、心理的負担が軽減されることが期待される。

## ②子育て知識を提供する

かつて、子育てに関する知識は、祖父母や地域の人たちから伝えられたのだろうが、核家族化の進行や育児環境の急変などによりそれが難しくなった現在、知識伝達の場が整備されることが必要になってきた。保育所や幼稚園も、知識伝達において、さまざまな取組みが可能だろう。

今回の研究において、保育者の方から園内での子どもの気になる様子が親に伝えられていた。家庭では気にならないものの、園という集団生活の場で気になる子どものなかには、特別なニーズを持つ子どもがいる可能性もあり、保育の専門家である保育者から親への、子どもの発達についての知識提供や子どもへのかかわり方についての知識提供は重要な子育て支援であろう。

## ③園で子どもを育てる

今回の結果からは、園生活に関して戸惑いを示す子どもが少なからずおり、そして、そうした子どもの様子に接して親は心配をすることがわかった。内容としては友だち関係の心配が多かったが、これについては、親として何とかしたくても、家庭内での対応には限界がある。友だち関係

を育てられるのは保育者であろう。今回の結果において、担任への相談が心配事の解決に有効だったという記述は、このことに関連すると思われる。また、親にとって行事が子どもの成長を感じ取る機会となっているという結果からは、行事に向けての保育の取組みの重要性が示唆される。〈園で子どもをしっかりと保育する。そして、子どもの育ちを通して、親に子育ての楽しさや喜びを味わってもらおう〉という子育て支援の視点が考えられる。

近年、地域の子育て力が低下する中で、子育ての支援者として保育者がクローズアップされてきており(木原, 2009)、保育者への提言もなされている(中野・土谷, 1999; 土谷・太田, 2005)。しかし、能力以上の親支援をしようとして疲れきってしまっている保育者がいる。子どもが好きで保育者になった人は多いが、親を支援したいと思って保育者になった人は少ないであろうことを考えると、親支援に時間とエネルギーをとられること自体、保育者としては、とてもつらいことと思われる。さらに、子どものことが大好きな保育者は、「子どものことがかわいくない人、子どものことを第一に考えられない人がいることが信じられない」ため、子ども中心に考えていないように見える親に出会うと、親を変えなくてはならないという思いが強くなりがちである。しかし、人生の歴史と背景を持つ親が簡単に変わるはずもなく、無力感を持つ。一方で今回、こんなにも子どもたちが園生活を家庭に持ち込むことがわかった。このことを踏まえると、本来得意である子どもへのかかわりを充実させることで、ひいては親への支援もできると思われる。これは、今回の対象者のように一時期子育てで不安やストレスを抱える親のみではなく、特別なニーズを持つ子どもの親の場合でも同様と思われる(藤崎・木原, 2010)。親自身が問題状況を抱えている場合も増えているが、園外の専門家や専門機関と連携して、園外に委ねるところは委ねつつ、園でこそ出来ることはどういうことなのかを整理することが必要だろう。親支援を考える際には、〈子どもが園に楽しく通い、園に通う中で子どもの成長が実感されたとき、親は園を信頼し、そして、親も変わる〉という視点も大事だと思われる。

## 注

- 1) 該当園は特別な保育方針を掲げ、それに応じて特定の環境や教育方針を持った家庭の子どもが集まっているわけではない。園選択の主な理由は、家から近い、あるいは通園バスがあるなどの利便性や、小規模園であること（各年齢2クラス）などであり、大学付属園であることを理由としてあげる者は今回の対象者において13.9%と少ない。

## 引用文献

- 安藤明人 (1995). 子別れと集団 根ヶ山光一・鈴木晶夫 (編著). 子別れの心理学. 福村出版, pp.165-179.
- 藤崎春代 (1995). 幼児は園生活をどのように理解しているのか：一般的出来事表象の形成と発達の变化. 発達心理学研究, 6, 99-111.
- 藤崎春代 (1998). 幼児は園生活の多様性をどのようにとらえているのか：一般的出来事表象の形成と出来事の多様性. 発達心理学研究, 9, 221-231.
- 藤崎春代 (2002). 幼児の日常生活叙述の発達過程. 風間書房.
- 藤崎春代 (2011). 幼稚園入園当初の3歳児の様子と親の反応との関連—親が記述した日誌からの検討—. 昭和女子大学生生活心理研究所紀要, 13, 1-11.
- 藤崎春代・木原久美子 (2010). 「気になる」子どもの保育. ミネルヴァ書房.
- 人見一彦 (1988). 女性の成長と心の悩み：女子大生の自分史を通して. 創元社.
- 今井麻美 (2008). 幼稚園児を持つ母親の子どもと分離することの意味. 日本発達心理学会第19回大会発表論文集, 610.
- 今井麻美 (2009). 子どもの幼稚園入園に対する母親の意味づけ—入園児が第一子の母親と第二子の母親の違いに着目して—. 日本発達心理学会第20回大会発表論文集, 455.
- 今井麻美 (2010). 子どもの家庭から幼稚園への移行に伴い親子が「離れる」経験. 家庭教育研究所紀要, 32, 92-101.
- 柏木恵子・蓮香 園 (2000). 母子分離〈保育園に子どもを預ける〉についての母親の感情・認知—分離経験および職業の有無との関連で—. 家族心理学研究, 14, 61-74.
- 柏木恵子・若松素子 (1994). 「親になる」ことによる人格発達：生涯発達の観点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 木原久美子 (2009). 子どもと家族が育つ保育：特集・保育を通しての家族支援. 発達, 118, 52-57.
- 木原久美子 (2010). 保育行事. 藤崎春代・木原久美子. 「気になる」子どもの保育. ミネルヴァ書房, pp.63-77.
- 中野由美子・土谷みち子 (1999). 21世紀の親子支援：保育者へのメッセージ. ブレーン出版.
- 根ヶ山光一 (1999). 母親と子の結合と分離 東洋・柏木恵子 (編). 社会と家族の心理学. ミネルヴァ書房, pp.23-45.
- 根ヶ山光一 (2002). 発達行動学の視座—〈個〉の自立発達の人間科学的探究. 金子書房.
- 斉藤こずゑ・木下芳子・朝生あけみ (1986). 仲間関係. 無藤 隆・内田伸子・斉藤こずゑ (編). 子ども時代を豊かに：新しい保育心理学. 学文社, pp.59-111.
- 柴田幸一 (1985). 登園時における母子分離不安に及ぼす諸要因について. 静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会科学篇, 36, 185-193.
- 柴田幸一 (1986). 母子分離不安と3歳未満児保育について. 静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇), 37, 165-177.
- 志村聡子・篠原直美・廣瀬由起子・成川陽平・石川悦子 (2007). 5歳児3学期の行事への取り組みにとらえる「協同的な学び」：子どもたちを支える保育者の援助. 埼玉学園大学紀要人間学部篇, 7, 115-126.
- 塩崎尚美 (2002). 幼児期の子どもに対する母親の分離不安の変化—幼稚園入園後の日記調査の分析. 相模論叢, 15, 118-101 (44-61).
- 塩崎尚美・無藤 隆 (2006). 幼児に対する母親の分離意識：構成要素と影響要因. 発達心理学研究, 17, 39-49.
- 田丸尚美 (2009). 幼稚園への入園が子育てにもたらすもの—幼稚園保護者会による「子育てトーク」の実践から—. 福山市立女子短期大

学紀要, 39, 55-60.

土谷みち子・太田光洋（編著）（2005）。「気になる」からはじめる臨床保育. フレーベル館.  
山本多喜司・Wapner, S.（編）（1992）. 人生移行の発達心理学. 北大路書房.

## 謝 辞

調査にご協力いただきました保護者の皆様ならびに調査用紙配布などにご協力いただきました園の先生方にお礼申し上げます。また、草稿に対して貴重なご意見をいただきました東洋大学の久保ゆかり先生に感謝申し上げます。

本研究はJSPS科研費19530598の助成を受けました。

---

ふじさき はるよ（昭和女子大学大学院生活機構研究科）